

2009 年 5 月 30 日（土）

フロイトを読む会（第 12 回）

木村 祐治

「幻想の未来」（1927 年）

●フロイトによる「人間の文化」の定義

○人間の生を動物的な条件から抜け出させるすべてのもの

○動物の生との違いを作り出すもの

※「文明」とは区別されない

→（一般に）人間に利益を与える

文化の二つの重要な側面

1) 人間が自然の力を制御し、欲求を充足するべく自然のさまざまな財を獲得するために手にしてきた知識と能力

2) 人間どうしの関係と、獲得できた財の分配を規制するために必要な制度

→第 2 の側面を重要視？

どんな人でも文化の〈敵〉となりうる

＝共同生活を可能とするために文化から要求される犠牲を、大きな制約とを感じる

→文化の個人からの防衛が必要に

文化の機構・組織・規制 etc

文化＝少数者（支配者）→多数者（被支配者）への強制？

→そもそも、強制のもとで、欲動を放棄しながら構築されるのが文化では？

大衆の労働と欲動の放棄によって初めて文化が成立する

欲動の放棄という負担をどこまで軽減しうるか

欲動と人間に必要な負担とをどこまで和解させ、どのように償うか

芸術作品

○ごく原初的で、いまなお人間のもっとも深いところで感じられる文化による放棄の命令の代償としてもたらされる満足

○文化のために捧げられた犠牲との和解をもたらす

●「指導者」の重要性

大衆＝人間一般

○怠慢で、洞察力を欠く

○欲動を放棄したがらず、欲動放棄の必要性を議論で説得することも不可能

→手本となる指導者の必要性

cf.) オルテガ『大衆の反逆』(1930 年)

大衆＝「平均人」

歴史的産物？⇔フロイト

指導者の条件

○優れた見識によって生活の必要性を洞察し、自らの欲動願望を制御しうること

○大衆から独立していること（大衆迎合の危険回避）

「集団心理学と自我分析」（初版 1921 年、第 2 版 1923 年）

指導者を伴う集団こそが、ヨリ根源的で完全な集団

●欲動の放棄と超自我

外的な強制の内面化

→道徳的で社会的な存在に

文化の敵対者から、文化の担い手に

●宗教的イメージ＝文化がもたらすもっとも重要な財

○自然の猛威

科学の発達→自然現象の解明

○神々の役割

人間が共同生活をする中でたがいにもたらす苦悩に配慮し、文化的な規範が遵守

されるよう監視すること

●幻想

○人間の欲望から生まれる

○つねに虚偽、実現不可能なもの、現実と一致しないものであるとはかぎらない

○宗教的教義＝幻想

●宗教の功罪

道徳の維持＋不道徳の助長

→宗教の力で文化を促進することは賢明か？

●文化と宗教との関係の根本的変革

○文化的規範の理性的動機づけ

→宗教の教義に含まれた歴史的真理の利用を放棄

○科学＞宗教

宗教的イメージ

外部からもたらされ、「信じる」ことを求められる

科学

観察と推論に基づく思考プロセスの結果

論証可能→交換可能な「宗教」としての科学？